

主体的に社会の形成に参画する力を育てる社会科学習

地理的分野専門委員長 笠松町立笠松中学校 山田 雅史

1 はじめに

「問題が現に問題として残っているのは、簡単には解決できない問題だからであり、簡単に解決できると考えるのは、勉強が足りないからです。解決できない問題だからこそ、「地球的課題」になるのです。」全中社の地理的分野において指導助言されていた先生の言葉である。結論が定まっていないからこそ、安易に授業においてその結論を求めようとしてしまいがちなこれまでの実践を改めて振り返る言葉であった。社会に見られる課題の解決に向けて選択・判断するという、価値に認識を形成する授業が地理的分野でどのように実践されるべきか、その基盤となる事実に関する認識を獲得する授業がどうあるべきかを実践を通して考えてきた内容を確実に来年度の実践へとつなげたい。

2 研究内容、重点（下線部）とその方途

I 事実に関する認識を獲得する授業モデルの定着・発展

①岐中社における事実に関する認識の定義付け

②一単位時間における【認識を深める場】における手立て

→この場面では、社会的な見方を働かせ、事実的知識を概念的知識へと深めるための手立てが必要である。この概念的知識を形成することを目指し、「価値判断を問う」場面を位置付け、価値に関する認識を顕在化させる。

II 価値に関する認識を形成する授業モデルの構想・提案

①岐中社における事実に関する認識の定義付け

②価値に関する認識を形成する思考過程の明確化

→課題の設定、立場の分析、意見の対立、生徒がたどり着く結論とその根拠など、生徒の思考を明確にする。

③一単位時間における【認識を深める場】における手立て

→何をもって判断したかという判断基準の明確化をそれぞれの社会的事象において具体的に設定することで個人における価値に関する認識を形成することを目指す。

上記の研究内容を重点に照らして推進するために、本年度は事実に関する認識を獲得する授業と価値に関する認識を形成する授業について、それぞれ授業実践を行った。

3 授業実践を終えての成果と課題

(1) 研究内容 1 事実に関する認識を獲得する授業モデルの定着・発展についての授業実践

【授業者】 岐阜市立本荘中学校 森 一輝教諭

【単元名】 「北海道地方」

【概要】

北海道地方の農業について、ジャガイモの生産量が日本で一番多い理由を自然、環境、経済の視点で追究した。授業終盤では、北海道で生産したジャガイモが日本各地で加工されている理由を考える場面を設定し、北海道地方の地域的特色を捉えさせるようにした授業実践である。

○確かな教材研究がなされていた

→長期にわたる確かな教材研究に基づいて、北海道地方の農業をジャガイモの生産という観点から教材化していた。確かな事実を根拠とした教材は非常に魅力的なものであった。

○働かせる見方・考え方が明確であった

→本時に働かせる見方・考え方を明確にされており、生徒自身の追究もそれらの視点や方法をもとに行われていた。

●認識のずれを生み出す課題化が必要であった

→既習事項を生かし、これまでの学びを丁寧に確認しながらの課題化であったが、情報が多様であるがあまり、認識のずれを生み出す課題には至らなかった。資料や発問のさらなる精選が必要であり、必然性のある課題化こそが、追究の意欲、すなわち認識の獲得のためには欠かせないと感じた。

●事実に関する認識をより明確にする必要があった

→研究会の中で、「ジャガイモの生産量多いという学びを通して、生徒は北海道の何を捉えたのだらうか」という討議がなされた。森教諭はそれを確かにもっていたが、授業の終盤でそれらが若干あいまいになったと参観者が感じたからこそ話題となったと考える。北海道だからこそジャガイモが大量に生産できるが、北海道だからこそ加工には不向きであるという北海道の地域的特色のメリット、デメリットに気付かせたいという事実に関する認識が、生徒の認識獲得までにはやや至らなかった。

＜本実践からの学び＞

本実践では、上記で示したように事実に関する認識が、どの生徒にも獲得されたとは言いきれず、概念的知識を形成するまでには至らなかった。それでも生徒は交通網や気候の観点から、位置や空間的な広がりについて考察し、北海道とはどのような地域なのかを考えることができていたことから、何よりも、長期の教材研究にわたる確かな事実に基づく教材化は授業を成立させるうえで大前提になるものだと思えることができた。事実に関する認識とは、どのような授業であるべきかを示す授業実践であった。

(2) II 価値に関する認識を形成する授業モデルの構想・提案についての授業実践

【授業者】美濃市立美濃中学校 芝田 大樹教諭

【単元名】「身近な地域の調査」

【概要】

単元において美濃市の地形、交通と人口、産業の特色を学んだうえで、持続可能な美濃市であるために、「美濃市の政策を達成するために必要なものは何か」について同じ政策が必要だと感じる生徒同士の意図的な学習集団を形成し、話し合い、交流することでそれらの考えに共通するものが「美濃市がもつ強みである」ことを捉えさせるようにした授業実践である。

○地理的分野における価値に関する認識を形成する授業の在り方の一モデルとなりうる提案であった

→これまで、全体の中の一割であると考えられてきた地理的分野の価値に関する認識を形成する授業が「身近な地域の調査」でこそ可能であるのではないかと示唆する提案であった。

○意図的な単元構成がなされていた

→価値に関する認識を形成する授業を単元の中心となる授業と位置付け、単元において美濃市の地形、交通と人口、産業の学習を意図的に仕組んでいた。働かせるべき地理的な見方・考え方を逆算して単元において計画的に育成しようとする意図性が見られる単元構成であった。

●課題をより生徒にとって身近で必然性のあるものにしていく必要があった

→本時の課題は「美濃市の政策を実現するために必要なことは何か」であったが、美濃市に住む生徒であっても、政策を実現させなければならないという意識にはなかなか至らないと考えた。

●価値に関する認識を形成する授業の終末の展開の在り方をさらに考えていく必要がある

→授業の終盤で、芝田教諭が「みんなの改善案の共通点は何だろうか」という問いかけがなされた。共通点を見出さなければいけない理由を、生徒自身は実感していないように見受けられた。生徒自身が持続可能な美濃市を考えるうえで大切にしていた価値は何であるかを自覚させることと「美濃市の強み」という汎用性のある価値としてよいのかは、さらに検討する必要があった。

〈本実践からの学び〉

これまでの地理的分野価値に関する認識を形成する授業の多くは、アフリカ州や南アメリカ州などで実践されることが多かった。授業実践として公開しやすい時期ではないという理由で「身近な地域の調査」は実践が多くはなかったが、日本の諸地域についての学習を積み重ね、地理的な見方・考え方を十分に働かせられる生徒であれば、「身近な地域の調査」において、地域はどうあるべきかを考える価値に関する認識を形成する授業は、今後さらに実践を重ねていくべきであると感じた。そういった営みを重ねる中で、教材の在り方や思考過程をどのように明確化していくかを明らかにしていきたい。

4 まとめ

(1) 研究内容Ⅰ 事実に関する認識を獲得する授業モデルの定着・発展について

地理の授業の大部分を占める授業だからこそ、継続的により多くの単元で実践されるべきである。なお、その際に、地理的な見方・考え方を働かせること、そして、その働かせた見方・考え方によって獲得できる事実に関する認識がどういったものなのかを明らかにすることを大切にしていきたい。さらに、認識を深める場については、これからさらに実践を重ねていく必要がある。具体的には、全体交流後、価値判断を問う場面を位置付け、価値に関する認識を顕在化させることが考えられる。

(2) 研究内容Ⅱ 価値に関する認識を形成する授業モデルの構想・提案について

本年度の実践を終え、授業モデルを以下のように考えている。

1 課題の提示

「身近な地域の調査」を中心として、単元を通して考えてきた課題を設定し、提示をする。双方の意見に共感できる課題が望ましい。

2 考えづくり

既習内容を生かし、双方の意見についての認識を再構築する。この際、地理的な見方・考え方を働かせて考えをつくる。

3 全体交流

交流の際には問い返しをしながら、生徒の中にある判断基準となる価値を明らかにしていく。

4 判断基準の明確化

事例の提示や教師の発問によって、生徒の考えの中心にある価値を確認する。

5 判断基準に即した価値の選択

(個人における価値形成)

明らかになった価値に基づいて判断し、なぜその価値を大切にしたいのか、理由をまとめる。

6 振り返り

自己の変容を見つめながら、本時の学習を振り返る。

5 終わりに

森教諭、芝田教諭ともに、授業公開に積極的に立候補し、提案性のある授業実践を発表していただいたこと、それらの授業に対して、授業研究委員の先生方による活発な研究討議が行われたこと、若原教頭をはじめ、運営委員の先生方も委員会に参加くださり、指導助言をいただいたことなど、多くの先生方の「よりよい授業を生み出したい」という前向きな思いによって今年度の地理的分野の授業研究委員会が行われたことに感謝したい。そういった先生方の営みの中で生み出された成果や課題を来年度の研究へとつないでいきたい。